

地中海

MARE MEDITERRANEUM

2025. 3



令和7年3月1日発行(毎月1回1日発行)第73巻第3号

No.802

創刊理念

文化としての地中海、そうした概念が近代思想の郷愁として最近うかび上ってきた。それは、ローマでも、ギリシャでもなく、エジプトでもない。もっと古い発生的なものだ。別ないいかたをすれば、地中海的なクリマ、明朗で明るく、同時に人間的な感情とつよい同化力。あらゆる大陸の奥地から南下しまた北上した、すべての未開なものを同化してきた大きな力、——それをホメロス以来ピカソでも、ブラックでも、シロニーでも、みなおなじ気持でここがれる。

源泉的精神の、本質的な方向を指向するもの、それが「地中海」である。

地中海

二〇二五年 三月号 (通巻八〇二号)

◇今月の二十首詠……詩人旅立つ

養学登志子 2

作品A

仲西正子・中村博子他 4

A 中原 陽他 26

B 中江京子他 50

C 長尾さち他 60

A 植田和子他 72

■オリブ集 こなかよしと・小原香里他 40

◇今月の二人 芦田美代子・小貫恵子 14

私と短歌との出会い (271) 小田淑子 17

■石田明彦歌集「ロードノイズ」批評 18

「季節の軸」 道浦母都子

後部座席から見た景色 佐藤モニカ

あてどなさの中から 馬場昭徳

はにかむ天道虫 三好聖三

■〈第一歌集を読む〉24 16

小野雅子歌集「花筐」

―逝きたる夫と父知らぬ子と― 岩井久美子

◇色のアンソロジー 〈黒〉 檜垣美保子 38

■鑑賞・三好直太の歌 20 〈汝れ〉 久我田鶴子 48

■遊覧寄港〈萬葉集と花〉 藤井純子 46

■歌壇月旦 磯田ひさ子 47

斬新な「歌人入門」

■一月号作品批評 64

A……………檜垣美保子・色井静代

箕浦 勤・玉井綾子

B……………設楽まゆみ・菊地栄子

C……………三浦好博

オリブ集……………市原やよひ

十首選 酒井治子・佐藤光正 84

今月の二人・作品評 久我田鶴子 16

最近の歌誌より (編集部) 85

報告・信濃支社 中山真弓歌集を読む会 介恩とよ子 49

第19期オリブ集メンバー表 45

第71回地中海全国大会 (大津大会) ご案内 88

クリップ……………表3 87

神田通信……………表3

(表紙デザイン) Tazuko Kuga

詩人旅立つ

養学登志子

この星をあきらめるにはまだ早いと信じてよいかねむっててよいか

パンツはく犬三匹が連れられて電柱を過ぎまた電柱を過ぐ

熱き血の巡りていしや袋角そつと撫ずれば朱く伝わる

団子のごと泥まぶさるる蛞蝓よってたかつて蟻かつぎゆく

魂を抜かれしような貌をして抜歯の済みし人の出で来ぬ

アスファルトの切れ目に蟻の落としもの小さな小さな冬すみれ咲く

「イタダキマス」両手合わせる栗鼠の姿なり栗いくつ頬に詰めしや

夫婦とはわけのわからぬのがよいとわからぬままのこの身のひと世

一九三五年生まれ。

一九九四年没。入会。

一九九五年「地中海」入社。

歌集に『折りのかたち』(二〇一六年刊)がある。

ひとりごと相手のありて言えるもの独りで言うては何ともならぬ

もの言わばちゃちゃっと器用な指先のたしかむスマホ知った顔して

仙厓和尚笑って踊って絵を描いて丸に三角四角の難義

金色のチャックをぎゅぎゅっと引っぱればわっとあの貌 岡本太郎

色なして紅葉散りそむ神の庭幼らの声天より地より

神の庭師の碑のまわりには今年生まれのもみじのてのひら

店の軒端すすけし焔炉積み上げて夜の場面てどんなもんだろ

昨今は地球を壊すことばかり自分のものと思わぬのかしら

十四年経し梅干は「うつくしくつけて」とよこした二年生の君の

抽出しに並びし急須のあれこれの用なさぬものになりつつ此の世

年下の友よ君こそ吾を越えてよろつき白髪の爺となりいぬ

感謝の念だけは残ると二十億光年かなたへ詩人旅立つ

作品 A

仲 西 正 子

シャコバサボテン

・ 沖

小鳥らの落としものにてなるといふ庭に拾へり背き羽根ひとつ
高枝に数多色づく九年母にこの手とどかず地団駄を踏む
届かずとあきらめしこといくつをも重ねて我の歳月はあり
歌ひとつ生まねばならぬ夕つ方さかな屋までの十分の道
すれ違う女子高生の眉細き何想うかや北風さびし
紅白のシャコバサボテン届きたり運びくれたる人の意気のせ
数多なる蕾はつらつ咲くことを当然としてシャコバサボテン

中 村 博 子

次女の家移り

・ 漣

草津駅降りて十分足らずなり信号ふたつ便利なマンション
玄関のドア開くとクリスマスマスの華やき続きてくつろぎの部屋
彦根より草津へ家移りしたる次女十階窓に広がる見晴らし
さんさんと陽射し明るきリビングのそこ此処に飾るクリスマス一色
次女の思い大方通してマンションの内装便利に設えてある
まずサラダ食みてポテトのグラタンやドングのパンも完食したり
マンションは草抜くことも無き楽さ還暦の次女に相応しきかな

永 田 進 一

歳 末

・ 山

歳末の大掃除とて捨て去りぬ塵介となる古きパソコン
冬晴れの空の広さよ生駒山仰ぎて来年の幸を祈らむ
伝説の会長と言う名誉職さらりと捨てん素浪人の今
胸を打つ便りにしばし瞑目すペン持つ人の面差し思う
電車内の掲示は日英中韓の言葉が並ぶ二十一世紀の今
賑わいの黒門市場は様変わり路上で立ち食い外人観光客
専門店あらかた消えて食事処大型薬局スーパー繁盛す

永 塚 節 子

友 へ

・ 銀

生れし日を明日に控え逝きし友八十二年を一期となして
細き糸されど長き糸にして今日までをつなぎくれにし
おだやかな笑顔の内に秘め持ちし鋼のごとく動ぜぬ心
うすつべらなガリ版刷りの同人誌充たされていし青春なりき
公孫樹の黄葉に染まりし大通りあの秋の日を覚えていますか
とうとう風にのごとくに人は逝き人は残され日はまた昇る
道の辺に愛する人なくほとけのざひっそりと咲く十二月半ば

本元由美子

年年歳歳

・岡

霜畑の葉野菜なべてエメラルドに 朝陽をあびて光り耀く
 葉に洗ひ流せば人參はオレンジ色に透きとほるなり
 精魂を込めて作りたる正月の野菜を並べて狼が食ひちらす
 八十歳の夫とわれとが語り合ひ歳晩の今日もウオーキングする
 過疎の地の山川草木変はらねど世界に折る紛争のなきを
 冬の夜のイルミネーションの公園はハートに溢れ人は幸福に酔ふ
 大晦日やから集ひて食む蕎麦の年年歳歳はつか異なる

牧 雄彦

師走の風

・大

川沿ひの並木のけやき色づきていのち果てし葉がはらりと落ちぬ
 北山の妙見宮なる境内にいろはもみちの葉が燃えてゐる
 北山のかがやく紅葉の下にゐて逝きにし君が面影を追ふ
 かの世かと思ふばかりのもみち葉の燃えたつ中にしばし身を置く
 校庭の隅に積もれるさくら葉の赤、黄が風につつと動けり
 側溝にさくら紅葉が積もりゐる風に散りほひ夕暮れ迫る
 赫赫と槭葉揺れてひと棲まぬ家の庭にも師走の風吹く

松浦 禎子

四国路

・羊

カーテンの縞を透かしてとどきたる師走半ばの陽を胸元に
 昨夜かたりし物語さりと忘れてもそのわたくしを包みくれたる
 九十歳を目の前にして畳みこむわれに短歌ありなお愛されて
 一人住めば大掃除などの予定なく窓枠のほこり少しを叩く
 もの干しに下がるマスクの薄みどり今日語り合う人にあわせて
 年の瀬のおだしき光身にあびておほかなくもまっすぐにゆく
 七十年のえにし静かにふりむくも師の四国路を踏みしことなく

松本多摩子

娘のライン

・桜

風邪ひいてないかと案じる娘のライン今日も元気に働きました
 風邪きみという娘のライン人混みはマスクをせよとラインを返す
 三代の揃う京都のもみじ狩り永観堂の盛りに会いぬ
 何年も人は住まぬに冬薔薇門よりのぞく朝の散歩道
 花好きが娘に伝わりて買ひし花ラインに届く聖夜も近し
 マスクしてエプロンつけて児童館子らの見守り二十年を越ゆ
 帰省の子帰りしちの静けさは寂しさ安堵の混じる一日に

三浦 好博

夢無きひと

・銚

膝痛い腰が痛いと言ひて夢無き眠りに入りぬ
 公園の銀杏もみちを掻き集め掻き集めつつ詩人は無理だ
 また料理作つて欲しと言ふのみぞ料理のプロの脳病む友に
 忙しい忙しいとてやり方が悪いだけなり只ふりをしして
 昔なら颯爽ポールウォーキング八十越えてチンタラの杖
 風邪引けば直ぐ肺炎ぞ恐れつつ夢無きひととなりてゐる日々
 武器持たぬ国コスタリカ産と告げ淹れ呉る友の珈琲旨し

三木 まり

碧

・昂

ただひとつ見分けられるオリオンを探し真冬の空を見上げる
 たくさんの神のギフトを持つ人の絵は柔らく言葉あかるく
 耳鳴りを宇宙からの通信と信じていたころ鍵っ子の頃
 銀いろの鍵を首から下げていた誰にも見えない友だちがいた
 誰ひとり気付かずにした友だちよあなたの瞳は碧く清しく
 いつまでもいつでも逢えると思つていたあなたの声の思い出せない
 華やかに燃える夕日を追いかけてひたすら走るひとりで走る

宮本靖彦

歳末雑詠

・凌

夕暮は出園ずらりママチャリの後部座席に幼ははしやく
梅干のやうな夕陽が沈みゆく高槻城跡の真上あたりに
日経の三枝昂之歌壇欄切りとり置けば机に光る
年一度年賀に使用のプリンター十年目の今刷るをいやがる
数減りし賀状書き終へ投函に黒雲まとふ夕日燦燦
行き慣れしスーバーなれど歳末のレジ列長きに職意喪失
夕空を桃色に伸ぶる雲竜型近き新年寿ぐやうに

三好聖三

アパート

・伊

柏原宗一が薬師丸ひろ子と擦れ違ふ玉川学園の廊下のもなか
あの飲み屋に磨赤兒が来ていたとほろ酔いかげんの弟が言う
警官と聞きて素早く身を隠す学生左翼のわれとわが友
近隣の窃盗事件の聞き込みの警官だったと弟が言う
それにしても隠れっぶりが見事だねと笑いながらに弟が言う
オーシャンズ8の役に零したる鑑感おかしきアン・ハサウェイは
舞台にて凄む毒婦に醜女まで窮み美しき余貴美子姐

御代田澄江

ノーベル平和賞

・茨

日本被団協ノーベル平和賞受賞核に痛められたる人等救へよ
被団協に救はるる人類の一人ぞわれ人としこの後如何に生きむや
住む町に小さき収穫祭ありて姉妹都市二市の出展も受く
芋・大根・葱・白菜と買ひ込む人ら吾もと買ふ苗オリブレモン
レモン苗に黄色く一果実の付くをカラス目ざとく偵察に来る
地元企業開発の自動運転車人気となり大人子供の行列なしぬ
こな雪のやうなる花持つ柊に吾の心の寄りゆくしばし

もとむらしげと

満月

・そ

我はわが歌を詠むのみ庭に来るつがいの鳩の声に親しむ
一人から五人の家族を作りだし我から欠けてゆく世の習い
秋寒のポストの中に干からびし蜥蜴のありて寂しかりけり
わが庭に棲みたる蜥蜴いくたびも目に遭いたれば親しみ覚ゆ
三度目の手足口病に臥せりつつ孫はいのちの灯りを点す
老衰に逝きたる辛を思うとき管につながれしわが父憐れ
雅やかに道長の詠みし満月のいよよ欠けゆきドラマは終わる

桃原佳子

夫の入院

・沖

一の一担任の生徒古稀迎う我は七十九歳しき食事
生徒らの古稀の会なり古き生徒の記憶湧き来る顔見ておれば
尉 鶴が来て鶴が来て我が庭は忙しき冬の営みつつく
コルセットに腰痛の身固められ夜は長きと嘆く夫はも
突然の夫の入院あたふたと過ぎゆく夜も食べねばならぬ
ひと月を経て退院の許可あり夫婦宅する共に安堵す
ご近所へ南瓜をととりて御裾分け四十個の南瓜大根へ化ける

山下雅子

起重機

・習

澄みわたる紺青の空に赤と白の起重機二台動くともなし
ふと見れば起重機はその向きを変えこの歳末を作業中なり
かつて此所は瑞穂ゆたかなりし地よあの一望の緑いずこへ
開発の波に乗るらしこの辺りまずは病院を地元よろこぶ
開発に及ぶ人智の力ならん縁失うむなしさなきや
車窓に見る土の山ありいかように変わりゆくやら氣にしつつ過ぐ
一月の二日はわが家の新年会うから二十名のにきわい描く

山野 幸司 櫟

・沖

わがクヌギ春を待ちつつ身をふるい裸木星を突き風に揺れ合う
クヌギ切る季節となりし正月に何に向き合う老い抱え込む
公園の樹々暗れ暗れと見下ろせり仰げば光る山脈うれし
公園の冬に色づく樹々閉む広場子ども群る声する
トラックは闇が吸い込む田の中にただ坐りいる夜空を仰ぎ
丁寧に起こさる田には群れ鶏春連れながら夕日蹴散らす
友を待ち闇におおわれ坐り込む頭上の月のほのほの照らす

山本 孟

居留守

・大

留守の部屋無音の満てり吊したる服もズボンも動くことなし
テレビ消し無音を聴けば補聴器を通してわからぬ音の満ちある
老人のテレビ見る時尿もれのCM流す商売上手
完全に無職なれども生きをれば起きて食事をとらねばならぬ
老い独り電子レンジの前に立ち今日もめくめるカレーとおでん
強風に帽子飛ばしし妻の道品帽子の鈎は全て短し
若松線に故郷ありとふ女教師は夫を介護し先に逝きたり

養学 登志子

手をうてば

・凌

大寺の天井の龍手をうてば父が母呼ぶあの音に似る
常楽寺の護符は鬼なり華奢にしてはつかに笑まい禍はらう
華奢に笑み細き二本の角のあるお札をかかげ日々のやすけし
ひとり居にあんなこんな守り札にきやかならむ声聞こゆれば
護摩を焚き祈りをこめしというお札元日の朝届く年々
かばちゃ一個心遣いの四つ切りにて届くやさしさ冬至の近し
九十年ぶりのおむつをはいてはいる銜わず九十二歳の詩人

横田 敏子

「ありがとう」

・福

空っぱの心に波が押し寄せるテレビの画面を越えそうな海
寒けれど待ちこがれる初雪よ今年は富士の麓にて待つ
風の庭に咲きいる薔薇想う無人となりて四月のわが家
アマリス取り込めぬまま寒さ来て凍えておらん冬を越せるや
燦爛と降る太陽に瞳を閉じぬ雪の故郷に届けたい光
毎月の勉強会の歌届け一首、一首に作者浮かび来
忙しき歌の仕事の何もかも引き受けくれし友よ「ありがとう」

磯田 ひさ子

弁天堂

・森

不忍池の中洲の弁天堂とて狭しと碑の建つ
使ひたる扇や筆の古りたれば昔も今も塚に納めて
人間のくらしに添ひしけなげさに庖丁塚も糸塚もあり
いのちうばふ罪ほろほしき鯉塚 鳥塚ひときは大石碑
年の瀬の不忍池を亡き友と寄る辺なきはなしつつ歩みき
鋭角に池に刺さりし枯れ蓮の影がゆらゆらなだめくれたり
陽の落ちてうすくらがりの歳の暮れ心弱りもおぼろになしぬ

市原 やよひ

溪谷

・萬

枯葉踏み谷に降り行く道の辺に晶子の碑ありもみじの下に
谷底に鋭く光るもの見えて水と知りたり樹間の先に
枯枝の杖を突きつつすれ違ふ人に聞いてる谷までの距離
道問えばそれぞれ違ふ客あり光満ちたる冬の林に
溪谷の帰りの道に現れし豆腐屋広き庭に井戸あり
両の手に豆腐購いふと見れば「清流の町」を名乗りていたり
目裏のもみじと豆腐の土産持ち大夕焼けの中を帰る来

梅本武義

神輿は残る

・辛

瀬戸海の見える境内遊びし日神輿は残る担ぐ者無く
 二千歩は夢多き日の川沿いの穂すきの道風を聞きつつ
 松茸を採りし頃の松籟よ 櫟の木々の落葉する音
 目白鳴き枇杷の花咲く朝戸出は通院日なり五院の一つの
 踏切を気付かず通過し通夜帰る八十路越えての運転怖し
 笑えずと自白のプーチンウクライナ侵攻の悔い口には出せず
 プーチンに頼る心をトランプに自信のあるを垣間見るわれ

大浪美雪

安房

・森

「鯨の道」より書にせしと案内あり秋の一日安房へと向かう
 待ち合せとアナウンスありて思ひ出す半島の奥は果線区間を
 トンネルを抜けて浦賀水道沿ひくもり日の今日富士は見えずに
 対岸の尻尾にひとつ城ヶ島丸き小石を置きたるやうに
 みどり濃き鋸山を背にしパンバスクラスは長き穂ゆらす
 条幅に仕立てられたる吾が歌の一時に知る書に負けてをり
 安房の地の歌集は大事と言ひくれし書家恵泉師に深く礼する

奥田陽子

季節

・羊

ようやくに蕾伸び米し曼珠沙華今年彼岸に遅れて咲かん
 不意打ちの雨にけぶりてゆく岸辺きびす返して駆けぬけて米し
 もう今は木枯るとき贈られし品にしばらく眼を置きており
 長くながく娘は話しおり東京に寒波及ぶと告げられし夜を
 水なくてシャコバは花を咲かせつくわが発ちし日も帰られし今日も
 言葉ふとときいたりき一瞬の医師のけわしき眼のよみがえる
 さりげなきひと日となさん会話してのちをしだいに暮れゆく冬日

小野雅子

むかし遊び

・辛

「むかし遊び」を小学校で教へるといふ「超」のつく老人クラブ
 おはじき双六だるま落とし体育館で実演といふ
 数珠玉の色づきを待ちお手玉を作りぬ布の手触りやさし
 お手玉は小豆を入れて作りしと母の世代の豊かさをきく
 食べ物をおもちやにしていゐの幼きわれに浮かびし疑問
 お手玉もおはじきも繰取りも手を使ふ技なりむかしの遊び
 現代の子はボタンを押して遊びあふそれにも技はあるとはいへど

神田鈴子

朱きひとひら

・大

嫁、孫の誕生祝に囲む卓バスデーケーキの蠟のきらめく
 半桶に盛りたる飯のたちまちに海苔に巻かれて舌に溶けゆく
 結婚を控へし孫の生き生きと家族の祝福に頬を赤らむ
 やがてわれもひ孫を抱く日のあらむ心ほのぼのふくらむ夕べ
 冬の道に転びし友の大怪我にかくる言葉もあらず息呑む
 漸くに通じたる電話の声細しひたすら祈る回復の日を
 ひさびさに逢はむ友へのプレゼント添ふる紅葉の朱きひとひら

上林節江

陸奥国一之宮

・湾

神域ぞ千年杉の参道のきよめられたる石段のぼる
 陸奥国一之宮なりあたらしき繩に紙垂ゆれて真白し
 多羅葉のくれないの実のめでたさも今日の吉事とししばらく仰ぐ
 ねもころに「お正月さま」の御札抱き皆おじぎして山門を出る
 うつくしき千賀浦見ゆ古代より藻塩の神事愛されながら
 参拝のついでなどとは言うまい旧亀井邸の雅をめぐる
 シオーモの小径を行けば「童話にて宮沢賢治の造語」と碑あり

菊地栄子

小鳥のように

・海

食べやすく熟れたるリンゴそれさえも食みあましつ三月がくる
太陽の回らぬ裏側冷たかり樗の大樹に朝がおとなう

写し絵の真中に黒き影落とすひと本の樹をわれはうとみぬ

雀には雀の旋夕早く埒の幹に呼びよせている

ごだごだと言いたき時は草引かんもうこんなにも小さきが生う

ひるがえり飛ばされ着地の枯れ一葉小鳥のように驚かせくる

剪定の後に見え来るものありや定家葛のしなやかな枝

草刈十郎

百舌鳥

・世

宅配に秋をつめこみ届きたる心こもりし果実のあまた

意表つく雨に残暑のをさまりて生れたる涼に秋気漂ふ

辛党で甘党でもあり好きなもの飲み食ひ続く暑氣払ふなり

強風に吹かれいまにも切れさうで切れず震へる蜘蛛の罠ひとつ

いつまでも続きし残暑に出遅れし秋は一気に走り去りたり

もんもん胸をなやますことありて百舌鳥よりわれの猛りたきふ

きのふ今日明日をつなげる糸のごと飛行機雲の白き一線

河野繁子

師走

・雁

エリンギを手でさき焼けば松茸に劣らぬ美味さ ひとりの師走

白菜をくたくたに煮る夕餉どきふとドア開き入りくる気配

となりより肉じゃが出来たとラインあり否応なしに入り来しスマホ

娘の家族となりに住める幸せを我にくれたる写真ほほえむ

物指しはみんな違えど縁ありて繋がりゆけり曾孫七人目

朝は晴れ、しぐれ葵と繰り返す天の神様忙しき師走

老いの日々安らかならず田舎にも間バイトかもあやしい電話

小林能子

二〇二五年 初春

・羊

サーカスは遊行寺 桜の柏尾川 正月南京町の思ひ出

書初めに「平和国家日本」 筆をもち畏れまるわれら幸せなりき

戦争を知らぬ世代に語るべき記憶はうすれ言葉もおぼろ

復興もなかなかの能登の人々を今日もTVにおぼつ見つむ

里帰り諦めしひと来れぬひと事態を恐れ船らぬひと

春待つとこれは会津より藤棚の雪を被ける写真が届く

丸まりし雲もほぐれて房総の初春 工場の煙たなびく

近藤栄昭

坊さん殺し

・虹

梅雨明けて（ハイ温度計）日本海「先生二十一度」（わい水泳）

本堂の端から端へ床を拭く木目に拭けと走り許さず

細三本家族でよじって太細につるべの水汲み新細匂う

うす金を切って袋の縛り金梨の袋かけ指先の傷

刈り取った切り口あふれる稲の水肩に匂い来あせ道細い

化成肥料二袋二十四キロ休み場へ背中あずける息整える

お檀家へお札配りと雪の中一月四日は「坊さん殺し」

近藤芳仙

埴輪展

・信

音楽を奏でて舞をまふ埴輪いかなる亡王の墓を守るや

埴輪展の「踊る人々」踊るのか手綱引くのか腕上げてゐる

出土する埴輪の数多この墳墓守らせ給ふに力を見する

古代の色再現されて白・グレー・紅殻ありてバランスも好き

埴輪棺なるものありて横長に空洞暗く見えぬも怪し

想ひの外大き埴輪よ 守り立つ墳墓の死者と交信ありや

「死者の書」は棺の中より始まり埴輪の死者に埴輪見えしや

坂上直美

晩秋

・天

一日の小さき出来事ラインして返事のなきを少しさびしむ
 年賀状絶えて久しき友人の恙あらざるや問うこともなし
 とどめあえず一人ひとりやめていく力あらざるグループ長 われ
 今日もまた世界は揺れて風吹く 日本の片隅珈琲を喫む
 肉食を為し得ぬ人の語るらく幼きときに鶏を殺すと
 子どもらの呼びかわす声路上より 秋天高く雲一つなし
 胸ぬちにもつるもののいくつかのややほぐれゆく穏しき小春

坂出裕子

紅葉

・洛

神様の賜へる幸か窓に寄り庭に降り立ち紅葉ひろへる
 のびのびと枝をひろげて秋の日の光の中に楓かがやく
 庭の辺のもみち燃えをりくれないに秋の光をいつばいに浴び
 赤と黄とみどり織りなす紅葉のひと葉もあらず同じ模様
 天然の技の織りなす紅葉は無限の才の無二の作品
 生きてゐる今がしあはせくれなるに燃ゆるもみちのいのちかがやく
 青空をゆつくり伸びてゆく雲の行く方にあらむ今日のしあはせ

佐藤道子

異変

・甲

かつて無き冬の青空高々と風冷たければマフラー巻きぬ
 ケムトレール撤くの止めしか天高く雲一つ無き冬の火空
 植物は光に应へて育つらし霜月真白き百合が花咲く
 たんぽぽも蕾を持ちてひっそりと冬の青空見上げて居りぬ
 夏のうち休みて居りし時計草十一月にまた咲き初めぬ
 夏の間葉のみ大きく育ちぬしクリスマスローズ蕾を持たず
 時ならぬ師走にカボック若芽持つ今年の冬は異変がつづく

篠原まり子

夕暮れ

・羊

思い出を手繰るばかりの終日を断捨離決行する外はなし
 八十代終る新しきカレンダー未知なる日々の数字空しき
 夏と冬小さい秋は片隅でそっと咲きいるブライダルベル
 降りしきる公孫樹もみじを行きゆけば黄色に染まる心と体
 友の計報嘆くことなく合掌すまた違う日まで間近きことよ
 シクラメンの鉢を並べて炎とし部屋暖かき師走となりぬ
 飲み菓ひと粒転がり見つからず小鳥と捜す夕暮れ早し

柴田登志恵

まほろば

・天

ルミナリエ湊に街にともりそめ六甲山系うすら雪ふる
 胸奥に龍棲まはする族の裔 空と海とのあはひを生きる
 水河期の花咲きのこる野の果てに龍の鱗が雪となりゆく
 老い龍の鱗ふりにし海峡を渡り来たり背黒龍は
 水原のぬるむを待ちて生れし雛南へわたる後驅の群れ
 龍の背にしばらく翼休めしと背黒龍の翁のはなし
 龍の髭なる音立つる斜張橋大和まほろば背黒龍飛ぶ

鈴木結志

光量計算機

・福

一滴の白露もうたの題材の一つにありて詩のいのち持つ
 成功して救わるる忍耐と努力野口英世が手本でありぬ
 逆筆も変化の技と追加う書の維新ともおのれをみがく
 廻路効率三つの光で計算実証「光量計算機」東大チームが開発という
 一休のトンチに及ぶライフスタイル笑いの効果おのれを癒す
 万葉の珠玉のうたに重ね詠むマンガが解きし風流談義
 スマホ世に古筆模案のひとつと言わるるほどに生きて筆とる

関根 榮子

つわぶきの花

・埼

庭隅に夕陽めぐれば思わざる黄もあざやかにつわぶきの花
散りきらぬもみじの色ど残りいし師走の庭に書類など焚く
煤払いやがては死語か遠き日のかまと並びいしわれのふるさと
年内に早々と椿の咲き始めしばし剪定の手を休めおり
内釜に飯を残しつつ洗いおり庭先に撒くは雀らのため
雲多き空に一瞬夕映の広がり大なる後光のごとし
あの時に言えば良かったこといくつ年経ることに思い出しおり

関根 和美

赤べこ

・埼

如何に食へ生きのびしかと夫のこと医師は奇跡の症例という
先をゆく者あとになり後の者さきになるとの聖句さながら
高きより君を落としし袖子の樹の今年はいくつもならぬ気まぐれ
イスラエル国旗の星型いまさらにかこめかこめの手ぬぐいむすぶ
処世術なき敗者とぞ不快なる世事に長けたる歴史家の弁
赤べこの首振りいるもなつかしく客え出ぬまま見つめていたり
これでよしすべてよしとはゆかざるもまた蓋をして年を越えゆく

高尾 恭子

御簾をむすぶ

・大

またひとつあなたの歳に近づいて枯れた背骨が野太くなった
彼岸花ひとつり赤く生き死には季のめぐりの紙一重なり
年玉の新巻三枚ととのえて導眼剤を喉に落とす
七十を過ぎて夕空はれわたる〈友だちひやくにん〉ひとりを生きる
ウバユリはゆうらり揺れて折れそうで折れず世界のゆかみを仰ぐ
身の丈の末吉ならん雷かたき梅の梢に御簾をむすぶ
しろがねの川面おだしくハンカチをぎゅっと握って白鳥を追う

高津 砂千子

ユッカ

・零

さざんかのあまたのつぼみ紅ふふむ冬の入り口いろどるように
寒さにも暑さにも強いユッカなり一鉢もとめ冬を迎える
ひざ伸ばし背すじ伸ばして胸を張りさあ歩こうぞ寒きあしたを
「良いことを考えることから始めよう」声に出しつつ短冊に書く
こがらしに押されるようにスーパ―へ正月用の野菜かぞえて
年の瀬の迫ればなぜかふるさとの偲はるるなり餅つき羽根つき
年の差は二つ違いの姉とわれ常になかよく遊んだものを

滝田 靖子

正月

・新

風止みて音失ひし昼下がり人指し指の爪割れてゐる
今日はただ昨日の続き明日はただ今日の続きの一年終はる
早早と母は布団に潜り込み今年もひとり除夜の鐘聞く
新年をひとり迎へる友にまづメール除夜の鐘終はらぬうちに
来年の賀状はLINEにしようといふLINEが届く一月一日
食べて寝て駅伝を見てそれだけの母とふたりつきりの正月
興味のない番組ばかりの正月を中国のドラマ繰り返し見る

田土 成彦

結構

・宙

買ふものも特になけれど年明けのスーパーになんとなく行つてみる
寝めるとき断るときもつかひある「結構」と言ふ言葉の不思議
いい加減止めときなさい 湯の温度いい加減です意味不明瞭
掃路二キロばかり歩いて家に着きさて万歩計表示はいくら
数枚の皿と茶碗を濯ぎ終へ今日の夕餉のことなく終はる
春落ち葉路傍に散れば掃きたためここ四五日の朝の生業
伸びて来る爪ほつといてを伸ばしたら魔王の様になれるだらうか

田 土 才 惠

お正月

・宙

成長のさますさまじき孫打ち揃い一番ちっちゃいばあばがここに玄關の靴のサイズのでっかさにふと手が止まるあのベビーシューズまた来るね頭上に聞こゆこの先はいつのことやら元気で生きねば優しさに包まれ一日終わりたり成長のあとまざまざとみせ年賀状書かなくなつたと電話来ぬその声しやがれカート押せるといつの日か金剛山に登らんとせよと思ふともはやも年改まる体調とチャンスいつ来る金剛山千メートルの眺め夢みる

玉 井 綾 子

北 風

・羊

立冬の夜の北風に軒下の江戸風鈴が引き攀つている
クレンジングオイルをメイクと馴染ませること子のつらな浮き出させたし
真夜中に言い争いの気配あり吾は寝ていて知らぬこととす
デバイスを置くクレードル ゆりかごの意と知り養護の責務を思ふ
久々に会う先輩が「です」「ます」で話し許容の綱引きをする
朝起きて着替えパン食べ歯磨きし登校するって普通ですこい
学校の終業式がクリスマス 来年の無事をサントに願う

八 乙 女 由 朗

あいつら

・柴

跡継ぎに生まれしわれの弟は 昭由 徳宗 道 晃一
寺の子に生まれし者の行く末は身の置き処なし裸に去れり
鳥の巢をのぞくと登りし昭由が木の途中にて蛇と交差す
僧辞めてしたる仕事の数多し弱き家庭を扶け終えたり
黙多き六歳下の姉校後はとんとん焼きを独り作れり
流行歌手の渡世に乗れぬ弟は福祉をなせり 桐生に果てぬ
とせう飯を仕掛けもどりとて言いたるは野の墓に立つ燐を見たりと

久 我 田 鶴 子

ノ ラ

・羊

吐きたるや 地面に黄のものぶちまけて蹲りゐる年増のをんな
涙目のをんなの腰のくづし様 毛並の乱れたただことならず
やさぐれの上目遣ひが「見んなよ」とせいいっぱいの迫りかたする
頭陀袋ひきするやうに歩みくる寒の日陰に身を寄せながら
このあたりのものにさうはすいづくより来たりしものかよろほひにつつ
この冬のいちばん告ぐる朝の冷え 濡れるるやうな檻樓に凌ぎて
ベットにはならざる矜持そんなものあつたかさへもどうでもよくて



今日の二人

きょうの月

芦田美代子

雲の絵の臘脂色えんじのやくもが入り来るをスマホに撮りて娘に送る
 長年の友と日帰り旅行なす揺れなくなりし特急やくもで
 特急のやくもは全席指定なりからだをゆだねるゆったりの椅子
 はじめての伯備線なり紅葉を期待すれどもまだ夏の山
 何もないと新任社員が愚痴言いし新見の町をはじめて通る
 千屋牛の産地の新見牛追いの唄がのどかに頭をよぎる
 天皇の料理作りし人たりき名刺下さるおいしいと言え
 美しき穴道湖の夕日見たけれど帰りの電車に乗らねばならぬ
 牛乳屋からもおせちのチラシ来る十一月に入りしばかりに
 正月に子らは来るのかせち料理来ぬなら吾の分のみ買うに
 夫在せば子ら全員を集わせて正月祝うと言うであらうよ
 きょうの月は横を向きたる義母に似て瓜実顔でさみしそうなり
 義母に会えどわかりくれしか名を言えば反復したり美代子なのかと

わが小庭

狭い敷地の東側に、幅一メートルほどの庭がある。お母さんは食べる物ばかり植えていると、子どもが言う。

大きい木はかりん。芳香のある実がなっていたが、最近花は咲けども実がすぐ落ちてしまう。ペリーAは、毎年おいしい房ができ、ご近所さんに味見を願っている。

ブラックベリーは金網垣にからまって、酸っぱい実をつける。もらい手さんが三人はおられるが、もっとほしい。そのまま食べる人、ジャムにする人、もう一人はホワイトリカーに漬ける。コップ一杯いたいたが、赤い液が美しく甘くておいしい酒ができていた。お茶を教えるその方は、ガラスの杯にそそぎ、毎夜の食卓に並べて楽しむと言われていた。

金柑もたくさんの実をつける。この葉には揚羽蝶が卵を産む。金柑の木下にくちなしの小木がある。これにはオオスカシバが産卵する。初夏のころ、足長蜂が幼虫を捕らえ、かみつき、足でまるめて団子にし、かかえて飛び去るのを見た。図鑑では知っていたが、はじめて実際に見られた。楽しみがいっぱいの小庭である。